

取組の内容



被服学 I の様子



公開講座の様子

大分大学において、数寄屋袋を製作する教材を開発しています。日本の染織文化に関する理解を深めるため、和裁士の松村めぐみ先生と教育学部准教授 都甲由紀子(被服学)が共同で教材開発・公開講座を実施しました。

数寄屋袋とは、お茶席に必要な小物(お懐紙、くろもじ、扇子、帛紗など)を入れて持ち歩く袋です。お茶席に限らず、小物入れとして使うことができます。

平成30年度、令和元年度の被服学 I の授業と令和元年6月23日(日)に開催した大分大学公開講座で、帯や着物の生地を材料として数寄屋袋を作りました。受講生は「錦」という言葉の意味や和裁の技法について学び、絹糸の手触りを実感しつつ数寄屋袋を製作しました。表地と裏地の布を選んで組み合わせ、ミシンも使って縫い、世界にひとつの作品が完成しました。公開講座は8名募集のところ、11名(一般6名、高校生5名)の参加がありました。

「被服学 I」の授業で製作した経験を生かして公開講座の指導補助をした教育学部小学校教育コース3年生濱田茜音さんのコメント

数寄屋袋作りはとても楽しかったです。ミシンの使い方や縫い方を教える場面もあり、今後に生かせる経験ができたと思います。



受講生の作品

成果・評価

受講生の満足度は高かったようです。公開講座は、小中高の教員や高校の茶道部員が誘い合わせてきてくれました。「結構難しいと思ったけど、できた時がすごくうれしかったし、またつくりたいと思いました(高校生)」との感想が寄せられました。テキストについて「カラーなのと、豆知識がたくさん載っていてとても勉強になりました」というコメントをいただくことができました。テキスト(左)は電子書籍として販売予定です。10代から60代までの幅広い年齢層の受講生同士、交流しながら製作に取り組むことができました。



テキスト表紙

参考URL

・大分大学都甲研究室HP

<https://togolabo.jp>